

選評

朴晟希

木村兼葭堂筆「兼葭堂雅集図」の史的意義—十八世紀後半の日韓における日本文人の表象—

本論文は近年、韓国に於いてその実在が報告された木村兼葭堂筆「兼葭堂雅集図」（韓国・国立中央博物館蔵）について、その制作経緯と構成、造形表現の特色、さらに朝鮮での受容と影響にまで触れた貴重な論考である。本作品は従来、大坂の文人木村兼葭堂が1764年の朝鮮通信使訪日の際、その交流の中で描かれたことが文献から明らかであったが、2007年になってその実在が明らかになったものである。

まず第一章では本作品の制作の経緯とその全体構成を記している。臨済宗相国寺派の僧大典と通信使の製述官、書記など八名が交わした筆談と書簡の記録集『萍遇録』の記載を基に、本作品の制作依頼から完成までの経緯を細かに記しとどめる。併せて完成作を受け取った際の朝鮮側の喜びなども記し、この作品が絵画を通じての豊かな日朝交流の証であったことも書き添える。

続く第二章では「兼葭堂雅集図」の造形表現に見られる二つの特色を挙げる。水都大坂にある兼葭堂の書斎で行われた兼葭堂会の詩会を描き留めるという「現実世界の記録」の側面と、大都市大坂の町中にありながら風雅な文人生活を営む書斎兼葭堂の理想郷としての描写、という二側面である。前者では、画中に描かれた人物の描き分けが行われていること、また実際の兼葭堂からの景とは言えないまでも、朝鮮文化人にとって想起できる大坂イメージである水辺の風景描写を描いたことを挙げる。また水辺の景を描くにあたっては先達の描く大坂イメージを参照した可能性を指摘する。後者では、少々高い位置から俯瞰し、樹木や朝霧によって周囲と隔絶された場所であるかのように描いた演出方法を、中国伝統の手法であるとしながらも、これに加えて『三才図会』「地理」編のような中国の地誌関連の出版物からの学習をも指摘する。その理由として『三才図会』を含む中国の印刷物が東アジアの文人たちにとっての共通知識であったこと、そしてそれがゆえに日朝双方にとって共感をおぼえやすいものであったことを挙げる。筆者は加えて兼葭堂の詩作の趣向から「古」への強い意識を見、画面を彩る非常に鮮やかな青緑による彩色に明清画への強い志向を見、明清画の表現を参照することによって理想空間に変換しようとしたのだとする。そして筆者は兼葭堂が描き出そうとしたものを「高度に風雅な生活を嗜む新たな都市文人の姿」であると、朝鮮文人たちに伝えたメッセージは「市隱」の理念であると結論する。

第三章では「兼葭堂雅集図」の朝鮮での受容について記す。同時代の知識人たちに広く好評をもって受け止められ、日本の文人を代表する存在として記録されていたこと、また後代の人々にも同様に重要視されたことを述べる。またこれ以降、朝鮮における日本研究、日本絵画研究が活発化していったことも併せて述べ、これにより、近世最後の1811年通信使の派遣においては民間での交流が作品として遺されるなど一般化していったことを指摘する。

本論文は従来、その存在が文献上でのみ知られていた「兼葭堂雅集図」の全容を紹介し、これに美術史の立場から初めて検討を加えた先駆的な論文であり、本論文によって木村兼葭堂研究がなお一層進展することと考えられる。また本作品は、江戸時代における日本朝鮮両国の民間での交流を示す貴重な資料と言えるが、朝鮮における評価やその後の日朝文化交流の推移などをも記した本論文は優れて新知見に富む。筆者自身が述べるように、本作品じたいが朝鮮画壇に与えた影響について明らかになっていないことは惜しまれるが、これが明らかになる次稿が待ち遠しく感じられる。

以上の理由から、朴晟希氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。